

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381010

研究課題名(和文) 明治・大正・昭和初期の日本における自己実現思想の教育学的展開と教化政策

研究課題名(英文) The Japanese Educational Policy and the Pedagogical Development of Thoughts of Self-Realization throughout the Meiji, Taisho, and the Early Showa Periods

研究代表者

佐々木 英和 (Sasaki, Hidekazu)

宇都宮大学・地域連携教育研究センター・准教授

研究者番号：40292578

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：現代的に熟した「自己実現」という日本語の歴史的原点は、1895年に倫理学者の中島力造がイギリス英語“self-realisation”を「自我実現」と訳して発表した時点にある。その後、自己実現思想は、明治・大正・昭和初期をつうじて「個人と社会との関係性」を問いつける倫理思想として展開していたが、ファシズム期には「個人と社会との水平的調和」から「国家による国民の垂直的併合」へと転回させられる強制力が働いて、概念が大きく変質した。こうした歴史的経緯は、自己実現が専ら個人主義を象徴する言葉として扱われがちな現代的傾向を踏まえ、教育史的な基礎として新たな逆説的事実を発掘できたという点で重要である。

研究成果の概要(英文)：The word “jiko-jitsugen” has become very popular in modern Japan, but its original appearance in Japanese history can be traced to the moment when Rikizo Nakashima, a Japanese ethicist, translated the British word “self-realisation” into the Japanese word “jiga-jitsugen” in an 1895 publication. Subsequently, throughout the Meiji, Taisho, and the early Showa periods, thoughts of self-realization developed as a series of ethical percepts reflecting what the relationship between individual and society is, and should be, like. However, in the fascist era, the ideological constraints imposed on their concept of self-realization made young Japanese elites convert the idea of a horizontal individual-society harmony, producing the concept of a vertical absorption of the people into the state. As self-realization is predisposed to be an exclusive term symbolizing individualism in the present day, this paradoxical fact is a significant discovery in the educational history of Japan.

研究分野：教育学、社会教育学、生涯学習論

キーワード：自我実現 中島力造 トーマス・ヒル・グリーン ミューアヘッド 哲学館事件 井上哲次郎 教育勅語 人格

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の主題の「自己実現」は、中央教育審議会教育振興基本計画部会「第2期教育振興基本計画について(審議経過報告)」(2012年8月24日)の「教育の使命」の中で“生涯にわたって自己実現を目指す自立した個人”と表記されるなど、教育界でタイムリーな重要キーワードである。だが、管見では、「自己実現」それ自体に真正面から向きあい根底的な問い直しを進める研究がほとんど見当たらない。そのような状況の中、研究代表者は、教育・福祉・労働・経営・政治などの多領域に目配りした上で、諸々の自己実現概念を歴史的観点に立って整理・配列し鳥瞰して、20年近くかけて暫定的なラフスケッチを完成させていた。

とはいえ、研究代表者は、日本語「自己実現」の歴史的発祥や変質の経緯の明確化を優先したので、結果的に教育政策に触れることはあっても、教育分野に焦点化した考察を進めてこなかった。そのため、教育学や教育実践のキーワードとして「自己実現」が多用されているにもかかわらず、それを自覚的に定義して用いている人が少なく、その意味内容が多様化・拡散していることを問題視しつつも、十分に検証できていない。そこで、この用語についての教育学分野における歴史的事実を丁寧に掘り起こして整理することが喫緊の課題として浮かび上がった。

### 2. 研究の目的

本研究は、「明治・大正・昭和初期の日本における自己実現思想の教育学の展開と教化政策」と題している。本研究開始前において年代の確定は出来てはいないが、「自己実現」もしくは「自我実現」がイギリス英語“self-realisation”が倫理学分野から19世紀末に輸入され訳されたところに端を発する日本語であることは判明している。だが、それが学術的にどのように論じられ、特に当時の教育学にどのように受容され変質していったかについては、ほとんど手つかずのままである。これらについて実証的考察を深めることが、本研究の重要目的である。

また、こうした思想が教育政策化されていく中で、被教育者にどのように影響していったかについて、政策的意図や文化的・社会的背景などとの関わりにおいて分析・考察・描写する。特に、当時のエリート青年層に流行した自我実現説が教育勅語と調和・整合する価値観へと半ば強制編入され、その影響が及んでいく経過については丁寧に解明する。

### 3. 研究の方法

本研究は、1890年代から1940年代までを主たる考察範囲とすることを前提として、自己実現思想がどのように教育学的に展開し、どのように教育政策(教化政策)と絡みあっていったかを明らかにするという目的を達成するために、思想史と社会史とをクロスオ

ーバーさせながら政策の性格を考察するという手法を取る。

経年的には、海外の思想・哲学が日本の教育学に与えた影響を把握する段階と、日本独自の自己実現思想がどのように教育界で展開しているかを整理・描写する段階を経た上で、自己実現思想がどのような主体にどのようなものとして感受・理解されていったかを考察する。その際、当時の日本国家が自己実現思想に対してどのようなスタンスを取り、どのような自己実現思想を望ましいと考え、どのようにして政策化し普及させようとしたかに着目する。特に、「個人と国家との関係」をめぐる教育観を示す各種の言説を丁寧に検討する。

### 4. 研究成果

本研究において、研究費交付期間をつうじて、研究条件を整備することに成功したことが、大変に有意義である。具体的には、『丁西倫講演集』については創刊号から廃刊号までの全号547冊(1900~1949年)、『哲学雑誌』については創刊号『哲学会雑誌』から729号までの全号(1887~1955年)を揃えて、手元に置いて直に見られる体制を整えることができた。このことにより、自己実現概念を論じる上での確実な証拠となる史料が数多く入手できた。これらの基本史料を完備するという長年の目標がほぼ達成できた(目次等が欠落した冊子が若干ある)ことの意義は極めて大きく、研究内容を明らかにする前提が整ったという幸運は、今後の展開にも大きな期待を持たせるものである。

(1) これまでは大まかに目処をつけることができていたにすぎなかった「日本における自己実現思想の始まり」の様相を着実に把握できたことが、画期的なことである。自己実現思想が輸入され始めた明治中期において、イギリス理想主義が主導的な役割を果たした思想だったことが浮き彫りになったが、日本側の受容の仕方に焦点を当て直せば、重要ポイントとなる事実認識として、以下の四点を強調できる。

何より第一に、日本語「自己実現」の歴史的原点については、イギリス英語“self-realisation”を中島力造が「自我実現」と訳して『哲学雑誌』1895(明治28)年12月号に発表した時点だと確定できた。それは、1892(明治25)年10月に中島が哲学会例会で「英国新カント学派に就て」と題した講演の中でトーマス・ヒル・グリーン(Thomas Hill Green)の思想の大枠を紹介して以来3年を経て、満を持して登場した日本語が「自我実現」だったということの意味する。

第二に、日本における自己実現思想が「個人と社会との調和」概念として出発したという事実を新たに掘り起こせたことが、本研究にとっては極めて重要である。中島の解説によれば、“一個人より云へば人の目的は其の

人の真の自我(セルフ)の実現(リアリゼーション)なりと雖も、之を社会の外に於てはなし得べからず、之を以て社会の進歩即善を謀ると必要なり、自我の実現は之と共に進行するに外ならず、是れ目的を一般の善に置く所以なり”(中島力造「ジェー、エチ、ミュアヘッド氏倫理学」、哲学会編『哲学雑誌』第11巻第106号、哲学雑誌社、明治28[1895]年12月10日発行所収、983頁)といった定義づけがなされている。

第三に、「自我実現」もしくは「自己実現」という言葉は、イギリス理想主義の祖であるグリーンの名が常に前面に打ち出されつつも、実際にはミュアヘッド(Muirhead)による平易な自己実現思想を媒介として日本に広まったという事実が強調されなければならない。根源的事実として、1895年12月の時点で「自我実現」として訳されたのは、中島がミュアヘッドについて解説した論文においてである。こうした入り組んだ事態が生じたのは、グリーンが自己実現思想が「神と人間との調和的關係」を問い続けている点で非常に難解だったのに対して、ミュアヘッドのそれは「個人と社会との調和的整合」を推奨するものであり、キリスト教的背景を持たない日本人にとっても比較的容易に理解できるがゆえに受け入れやすいという一面があったからだと考えられる。

第四に、「自我実現」という言葉が造語されたタイミングは、近代日本語として「自我」が造語された瞬間でもある。そして、中島や桑木巖翼が「自己が自我へと実現すること」を「自我実現」として位置づけた思いを踏まえることにより、「自己実現」と「自我実現」とを分けて考えるべき倫理的意味を明らかにできた。

(2) 『哲学雑誌』や『倫理講演集』において、自己実現を主題とした論文や雑録などをピックアップしてだけでも、本研究の方法論それ自体に根本レベルから大きな示唆を与えるような重要な発見がいくつもあった。これにより、自己実現思想の教育学的展開を的確に捉えるためには、教育学一般を漠然と見渡すのではなく、主に倫理学と教育学との関係に焦点を絞るべきだという研究的指針が新たに導き出された。

特に、倫理教育の根幹に関わる出来事として1902(明治35)年に起きた「哲学館事件」をめぐる一次史料を発見・確認でき、通説を表層的に理解しているだけでは見えなかった様々な事実が判明したことが意義深い。この出来事をめぐる一連の動きの中で、1890年代に「個人と社会との調和」を中核概念として歴史的に登場した「自己実現」や「自我実現」が、恣意や思い込みによって如何様にも解釈されうる曖昧な言葉であることが再確認できた。

実際、文部省当局から「哲学館の倫理は国体にあわない不穩の学説である」という指摘

を受けたことに対して、哲学館講師の中島徳蔵からは「学説的事実を情報提供すること」と「実際に道徳を実践すること」とは区別すべきであるという立場から弁明が展開されたにもかかわらず、当時の文部省の隈本有尚視学官によって、ミュアヘッド(Muirhead)の『倫理学』が危険思想だと決めつけられてしまうことにより、そのキーワードの“自我実現説”について、“盗賊は盗賊たる自我を実現し、弑逆者は弑逆者たる自我を実現するを以て善なりと為す”とみなされる始末である(中島徳蔵「哲学館事件とその弁解」、丁酉倫理会編『倫理講演集』第11号、大日本図書株式会社、1903年2月15日発行所収、98頁)。

また、この例に典型的なように、国家による教化政策との兼ね合いで倫理分野において自己実現思想が話題にされてきたということが明らかになったことは、本研究において「国家」や「教化」に注目すべき歴史的意義を補強してくれている。

(3) 『倫理講演集』や『哲学雑誌』について編年的に読み解くことにより、新たな着想が得られた。つまり、各論者の自己実現観を、大きな歴史的流れの中で意味づけし直すことができたのである。

中でも特に、昭和初期の教育政策として、「自我実現=自己実現」の中心的理念に「自律的な個人ほど日本国家に自発的に服従する」という論理かつ倫理が、その事実性と当為性との境界を曖昧なままにして埋め込まれていった痕跡を再発見・再解釈できたことの意義は大きい。

井上哲次郎は、“自我実現といふことは、日本に於ては日本という特殊の境遇を透して始めて可能なることであるから、立派な日本人たる資格を完うする意味に取り扱はれなければならない”と宣言し、“『教育勅語』の中に列挙されたる徳目は自我実現の方法を示されたと云って差支ない”と主張している(井上哲次郎『日本精神の本質』、大倉廣文堂、1934年、341~355頁)。吉田熊次は、“理想主義的倫理学説”が“自我の実現とは自己の善とし信ずる所のものを実行することと説くが故に、自己以外の意志に従ふことは他律的道德として此を排斥せらる”ことを批判した上で、“忠孝は完全なる自我の実現であり、理想の実現であり自律的道德である”と主張して、「自我実現」の内実に対する理解の根本的な発想転換を迫る(吉田熊次『我が国体と教育勅語』[憲法教育資料]、文部省思想局編、1936年、48~49頁)。

研究代表者は、主としてエリート青年層を標的とした教化政策的な狙いが明確にある自己実現観の存在を、以前から意識していた。だが、本研究を実施したことにより、教化する側だけでなく教化される側の心情が垣間見えてきたことには極めて大きな意義がある。そこで、新たに浮かび上がった仮説は、

昭和初期の社会的ムードに抗えない青年インテリ層が「国家への服従は、私個人の自発的意思で選んだことだ」として自らを納得させる論理かつ倫理としての役割を、自己実現思想が果たした可能性である。

(4) 戦前の教育学においては、時代が下れば下るほど、「自己実現」や「自我実現」よりも「人格」という言葉のほうが用いられる傾向が強くなることが判明した。

むろん、内的な原理的理由として、「自己」や「自我」が個人本位の志向を想起するから「人格」のほうが好まれるという傾向はすでに押さえていた。だが、当該研究により、動機が正しければ天皇を殺す行為すら正当化してしまう危険な倫理学説が自我実現説であるといった言いがかりをつけられた「哲学館事件」が、教育政策的な外圧として機能したことが判明した。

このような背景があったため、当時の教育関係者が進んでは「自我実現」や「自己実現」という言葉を用いたがらず、「個人と社会との調和」を中核理念に持つ自己実現思想の実質的舞台は「人格」という日本語に移ったのである。

(5) 本研究を総括すると、以上のような歴史的経緯の新発見は、自己実現が専ら個人的な課題であり個人主義の象徴のごとく扱われがちな現代的傾向を踏まえるならば、教育史的な基礎として新たな逆説的事実を発掘できたという点で重要だと考える。その上で、研究代表者は、以下のことを新たな研究課題として認識するに至った。

第一に、「自己実現」という言葉と戦前の教育学との関係については、その前提も含めて、アプローチの仕方を変えなければならないということである。戦前の教育学において、自己実現思想の変遷を包括的に把握するためには、「人格」という言葉も十分に視野に入れなければならないという新たな研究課題が浮き上がった。逆に言えば、「狭義の教育学」という次元に絞れば、「自己実現」ではなく「人格」という言葉を追った方が、実質的に自己実現概念を明らかにするには有効だということが判明したのである。

第二に、自己実現思想に対する国家主義的影響力の強さが、事前に想定した以上に大きそうだということである。1890年代にイギリスから日本に輸入された自己実現思想は、明治・大正・昭和初期をつうじて「個人と社会との関係性」を問いつける倫理思想として展開していたけれども、昭和初期には「個人と社会との水平的調和」から「国家による国民の垂直的併合」へと転回させられる強制力が働いて概念が大きく変質してしまったという可能性が高い。これが適切な歴史認識であるかどうかについて、今後はより丁寧に検証しなければならない。

第三に、第二次世界大戦前には、国家主義

的な自己実現概念は、「神国主義的自己実現観」と呼んで良い域に至ったと考える。そのため、教育勅語や天皇制と自己実現概念との関係を改めて問うべきだという研究課題が浮上したのである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

佐々木英和「現代日本語『自己実現』の特徴を実証する基礎データの提示 - 質的データの量的把握による整理 - 」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第 64 号第 1 部、2014 年所収、221 ~ 246 頁。

佐々木英和「自己実現言説における『社会』の位置づけに関する一考察 - テキストマイニング手法による新事実の発見と実証の試み - 」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第 65 号第 1 部、2015 年所収、229 ~ 248 頁。

佐々木英和「自己実現言説における『社会』の意味合いについての歴史的考察 - テキストマイニング手法による量的研究と質的研究との接合の試み - 」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第 66 号第 1 部、2016 年所収、223 ~ 248 頁。

[学会発表](計 1 件)

Hidekazu SASAKI, *The 120-Year of History of Self-Realization in Japan: An Outline of Various Revolutionary Changes in the Relationships between Individuals and Society*, 31st International Congress of Psychology (ICP2016), PACIFICO Yokohama, 26 July 2016 発表予定。

[図書](計 1 件)

行安茂編『イギリス理想主義と河合栄治郎』、世界思想社、2014 年。担当部分は、佐々木英和「明治中後期における自己実現思想の輸入の様相 - 日本語『自我実現』の創造にイギリス理想主義が果たした役割 - 」(同上、196 ~ 212 頁)。

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

[その他]

ホームページ等として、宇都宮大学の学術情報リポジトリ(UU-AIR)の著者名の項目で「佐々木英和」と入力して、論文検索可能。  
<https://uuair.lib.utsunomiya-u.ac.jp/dspace/>

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 英和 (SASAKI, Hidekazu)

宇都宮大学・地域連携教育研究センター・  
准教授  
研究者番号：40292578

(2)研究分担者  
なし

(3)連携研究者  
なし